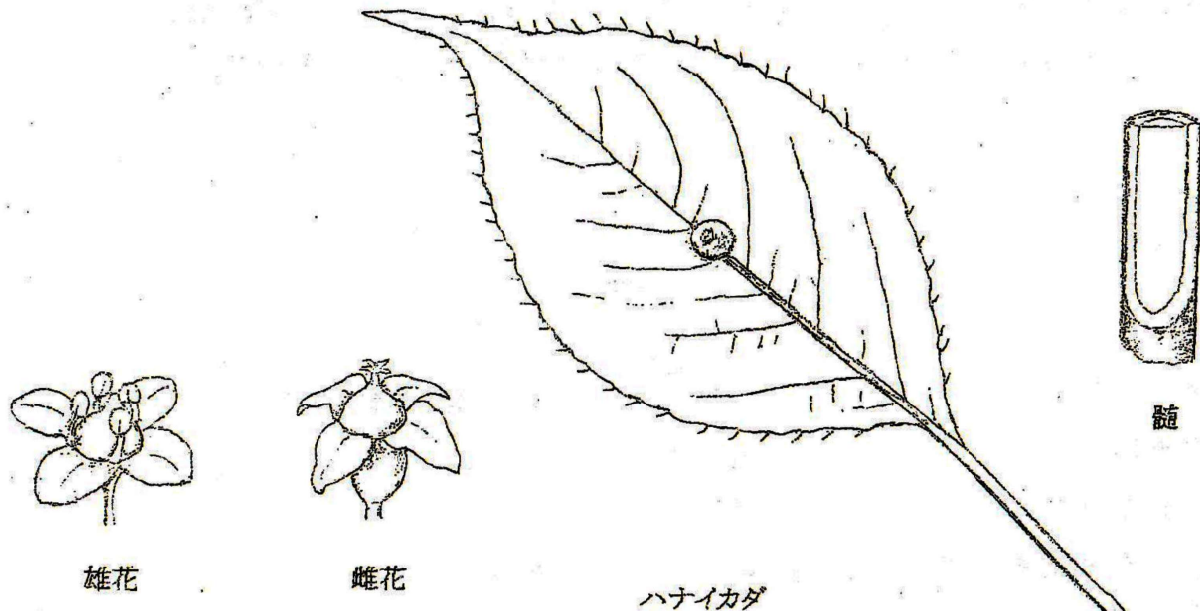


ハナイカダ *Helwingia japonica*



日本列島は狭小な割りに植物は多種多様で変化に富んでいる。変わり者には、枝から変わったヤマイモの‘むかご’や、葉の表面に無性芽をたくさんつけるコモチシダなど、特異な形状や生態を持った突飛なものが身近にかなり見られる。しかしながら、小さな花が葉の中央に咲く特異な植物は、ハナイカダの他には見当たらない。

ハナイカダの奇妙な構造は、花軸が葉柄から葉身の中央まで癒合したものである。よく見ると中央脈が花の位置までは太く、花から先の部分は細くなっている。また蕾の位置が葉の生長と共に変わるように見えることから、花軸と葉柄の癒合が推察できる。このように思えるのは、葉の基部が伸びるからである。

ハナイカダのように花が葉の中央につくものに、地中海地方原産で日本に輸入されたユリ科のナギイカダがあって、よく引き合いに出されるが、基本的には「似て非なる」ものである。ナギイカダの本来の葉は退化し、代わっていかにも葉のようにみせているのは、葉緑素をもった枝（葉状枝）である。したがって、ナギイカダの特異な姿は枝の変態であって、ハナイカダの変態とは意味が異なる。

ハナイカダの奇妙な姿は、里山に暮らす人たちの眼を惹き、多くの方言名のもとにもなっている。また、これとは逆に、ハナイカダの外観では解らない枝や葉の特長を方言名から知ることもあり、改めて植物方言の価値と必要性を思い知らされる。

①ハナイカダは雄株と雌株の区別があって、花は葉の中ほどに雌株は1個（時に2～3個付くこともあるが、普通1個）、雄花は数個つき、花はどちらも小さく（径4～6mm）、淡緑色で見栄えがしない。実も小さく、径6～7mmの扁球形の液果で、8～10月に黒く熟す。ブドウに似た味がして甘みがある。

実の形から「いぼ」を連想し、「イボナノキ」（新潟県佐渡）、「イボナ」（新潟県佐渡、滋賀県）、「イバナノキ」（新潟県佐渡）などの名が生まれている。艶やかな若葉から肌を連想し、実がそ

の真ん中にぽつんと付いているその姿は、いかにも‘いぼ’らしい。

②小粒の実黒く熟し、やがて果皮に皺ができて、さまざまなイメージを誘う。お灸の痕に見立てたのが、方言「ヤイトバナ」（長野県）である。

灸花といえはヘクソカズラの別名でもあるが、よりハナイカダの方がお灸の痕を思わせる。熟しきってしなびた実が、葉の上に鎮座ましましているさまは、いかにもお灸の痕に似つかわしい。

③実は黒く小粒だが、葉の上にポツンと乗っている奇妙な様は、眼を惹くとみえて、「アズキナ」（和歌山県）ともいわれてきた。

④「ナキナ」（奈良県吉野）、「イボナ」、「アズキナ」、「ママコナ」、「ヨメナ」（和歌山県伊都）、「ムコナ」（香川県綾歌）などの末尾の「ナ」は、若葉のことで、蔬菜的な食用に供した名残である。若葉は山菜の一つで、4～5月に若芽を枝のつけねから摘み取って食膳を賑わしたのであった。

若葉はあくがなく、ひたしものや胡麻あえに用いるのに手間がかからず、山菜のなかでも最も扱い易い。味は淡白で、丁度サラダに添えるレタスのようである。

葉は厚みがあり歯ざわりは、ハウレンソウに似ている。くせのない山菜は稀で、この使い易い性質は世話なしで楽な事から、塩、味噌、醤油など兎角調味料の乏しかった昔の暮らしには、好都合であったかもしれない。

葉は楕円形または倒卵形で、ヤマアジサイの葉を思わせる。あるいはミズキの幼木の葉に似ているが、ハナイカダの鋸歯は先が芒状で、先端はひげのように細く、容易に他の植物と見分けがつく。

ハナイカダは山地の林下に生え陰樹の性質があつて、谷間や北斜面など半日蔭を好む傾向がある。広く分布しており、容易に採取できた事であろう。

ハナイカダは本州、四国に普通に見られ（北海道南部、九州に点在し）、広く分布している。なお、本州南部、四国、九州にコバノハナイカダ*1が見られ、さらに奄美大島、徳之島、伊平屋島、沖縄本島にはリュウキュウハナイカダ*2が分布している。

いずれも近縁の種類で果実は黒熟する。*3

⑤「ホーズキ」（静岡県南伊豆）、「ヤマホーズキ」（長野県北佐久、静岡県）、「ホーズキノキ」（長野県北佐久）など名の源は、山里の子供達が玩具「ほうずき」を作るのにハナイカダの若い枝を使ったからである。

この「ほうずき」とは、手作りの玩具で、緑色をした若い枝を3cmほどに短く切り、樹皮を爪か刃物で傷つけ、すっぽり抜けた皮をほうずきのように鳴らして遊んだという。

⑥「トーシミ」（三重県員弁、伊賀）、「トーシン」（三重県伊賀）、「トーダイ」（愛知県段戸山）の名は、意外にもハナイカダの若い枝の髓から生まれた名である。

「とうしみ」とは「燈心」の転化で、燈心は燈台や行燈(あんどん)などの芯で枝の髓を燈油や菜種油に浸して油を吸収させ、その先端をともしたのであった。電灯のなかった昔には、身近に得られるハナイカダの髓は大いに重宝され、暮らしを明るくしたのであろう。

燈芯は、おもにイ（イグサ科）の髓を用いていたが、地方によっては、ノリウツギ、キブシ、ヤマブキ、ニワトコなど、さまざまな樹枝の髓が活かされ、ハナイカダもその一つであった。

⑦ハナイカダを「ママッコ」と言う地域は広く、主に関東にみられ、なお「ママコ」「ママコナ」「ママコノキ」など、「ママッコ」に類するママッコ系は鹿児島から岩手県まで南北に及ぶ。

「ママッコ」（栃木県、群馬県、埼玉県秩父、東京都八王子、神奈川県津久井、山梨県、長野県、静岡県）、

「ママコノテ」（岩手県東磐井）、

「ママコデ」（岩手県江刺）、

- 「ママコノキ」 (神奈川県、三重県員弁)、
- 「ママコナ」 (三重県、岡山県、熊本県、宮崎県東臼井、鹿児島県)、
- 「ママコ」 (山形県、長野県、山梨県河口、静岡県)、
- 「ママコギ」 (栃木県日光、鹿児島県大口)

このようにママッコ系の名は広い地域で用いられてきたこともあって、是非とも語源をしりたいところだが、残念ながら判然としていない。ある書には「‘ままっこ’」という名前も、継母からお灸を手にすえられた跡、またはままっ子いじめでつねられた傷の跡だと聞いて感心した」と記され、ヤイトバナと一緒に、目立たない小さな花をお灸の痕にたとえ、あるいは、つねられた痕を継子いじめとしている。しかしながら、全国的に広い地域にわたって、はたして暮らしの中で継子いじめが頻繁にあったとは考えにくい。牧野富太郎博士は、「ママッコは果実の円いのを米粒にたとえたものか」と図鑑に記されている。なるほど、実は赤飯にもなり、小豆になって飯事遊びを盛り上げたことであろう。

細々と言い伝えられてきた、ハナイカダの方言のかずかず。なかには、何に因んだ名なのか解らなくなってしまった名もあるが、「トーシン」「ホウズキ」「ナキナ」などは庶民の暮らしの中で培われてきた生活文化が凝縮されている。

ハナイカダは、茎の髓が燈心に役立ち、暮らしに光を、
樹皮が手作りの玩具となり、子供の遊びに喜びを、
若葉は菜となり、使いやすく、かつて優れた山菜であったとは。

- * 1 コバノハナイカダ *H. japonica* var. *parvifolia* Makino
ハナイカダの葉は長さ4~13cm、幅1.5~7cm、葉脈は4~6対あるが、コバノハナイカダは全体が小型で、葉は長さ2~6cm、幅1~3cm、葉脈2~4対。托葉も小さい。
- * 2 リュウキュウハナイカダ *H. liukuensis* Hatusima
葉は幅狭く、披針状長楕円形、長さ5~18cm、幅2~8cm。葉の先はやや尾状で長鋭尖頭。托葉は糸状。染色体数は2倍体で、 $2n=38$ 。
- * 3 台湾にはハナイカダの変種タイワンハナイカダがあり、果実は黒い。
中国の四川、雲南には雄花の小花柄の長い(7~25cm) *H. chinensis*がある。なおヒマラヤには*H. himalaica*が分布する。中国とヒマラヤの2種はともに果実は赤熟する。